黒板厨ゆうな☆マギカ　Rewrite

中条　剛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒板厨ゆうな☆マギカ　Ｒｅｗｒｉｔｅ

【Ｎコード】
Ｎ２８５１Ｙ

【作者名】
中条　剛

【あらすじ】
当作品は『魔法少女まどか☆マギカ』のパロディーとなっています。あ、とあるものが擬人化してますのでご注意をっ！なお、一部オリジナル展開があります。

1

少女はただ走っていた。

それは何かに追われているというわけでもなく。ただそのまま徒競走のように走っていた。

「……これは、なんなの……」

ただ彼女はそれしか言えず、何も考えることもできず、白と黒であしらわれた幾何学模様の廊下を走る。

彼女は一体全体なぜにここについたのかははっきりと分かってはいない。

気づいたらここにいたのだ。そしてただ何かに追われるということもなくただ走っているのだ。

これは一体何なんだろう。長い夢でも見てるんじゃないか。そんなことを思いながら。

彼女はただ走るだけ。

しばらく走るとコンサートホールのような場所にたどり着いた。

扇形に階段が広がっていて、その階段の先には扉があった。

「出口……！！」

そう、縋るように叫びながら彼女はその扉に向けて走っていく……！！

2

そこに広がっていたのは、闇。

ただ、破壊されつくした街並み。

もう面影はないが、そこにははっきりと自分が住む街、屈沢［こごみさわ］の街並みを浮かばせるものだった。

「……うそっ……！！　どうして……！！」

少女は思わず膝から崩れた。そして目から大粒の涙を出した。

しかし、彼女にその時間すらも与えなかった。

耳をつんざめく轟音が、空間に響いたからだ。

「な、なに……？！」

彼女は思わず耳をふさいだが、彼女の聴力は一時的ではあるもののほとんど失われてしまっていた。

「ここは……　どこなの？」

彼女は嘆くようにつぶやく。

しかし、誰も答えてはくれなかった。

ドゴン！！　とトラックに乗用車がぶつかったような、はたまたドラム缶がつぶされたような、そんな音が響いた。

思わず彼女は目を潜め、その音のする方に見た。

そこにあったのは。

3

黒い髪の少女だった。

肩まで伸ばしていた。服装はリボンをつけた、学生服のような、感じ。

どこにでも普通にいそうな感じではあるのに、彼女は一度もその人間を見たことはなかった。

彼女は一人で何かと戦っているようだった。

そこにいたのは、歯車に乗ったなにか。

あまりにも異形すぎて、形容できない存在だった。

「あれは……なに?!」

「あれはワルプルギスの夜。黒板の世界が現実の世界に出ていってしまったものなんだ」

「……あなたは?」

そこにいたのは、人間。

学生服のズボンを着て、カーディガンを着た少年だった。眼鏡をかけて、なんだか子供のようなあどけない笑顔を見せている。

「そうだね。僕の名前は……」

「矢代健吾、と言っておこうか」

健吾は笑って言った。

「まあ、今の状況を見ればわかるだろうけど。彼女は直やられる」

「……！！　そんなっ……！！」

「救いたいかい？」

こくり、彼女は頷く。

「じゃあ」

彼は右手を上げ。そして、言った。

「僕と契約して、黒板厨になってよ！」

4

「！！」

彼女はそこで目を覚ました。

いつもの部屋に、いつものベッドに、いつもの抱き枕がわりにしているうさぎのぬいぐるみ。

ここは、紛うことなき彼女の部屋だ。

そして、彼女は着替えを始めた。

ここは、屈沢町。

海に面した街で、再開発が進んでおり、街の中に風車やら、太陽光発電用のパネルやらがいろいろと置かれている。

そこを彼女は走る。

海岸際を走っている彼女を、これから昇る日が照らす。

彼女の名は清白優菜。

この街の中学校に通う、中学二年生。

彼女は張り切っていた。

なぜなら、今日は……。

5

「転校生がくるんだっけ？」

「そう！　しかも二人！」

優菜の話を黒板を黒板消しで拭きながら答えるのは、黄色い髪でポニーテールの少女。

彼女の名は寺島鈴菜。優菜の幼馴染である。

優菜はこの学校で他愛もない会話をしている。

しかし、気になることが一つ。

矢代健吾、と名乗った男が言ったあの言葉。

『僕と契約して、黒板厨になってよ！』

黒板厨、とはいったいなんなんだろう？

そして契約、とはなんなんだろう？

「ま！　所詮夢だよね！」

「なに、なんかあったの？」

「ううん！　なんでもない！」

優菜は笑って、答えた。

6

先生がやって来たのは始業を知らせるチャイムから15分ほどたってのことだった。走ってきたのか、息は乱れている。

まだクラスの雰囲気は休み時間の感じであったが、

「はい、座れー。ホームルームするぞー」

先生が席に座るのを促した。

「今日は転校生を紹介する。二人、ってのは君らも分かっているだろう」

ざわつく教室。

「静かにしろ。さあ、入ってこい」

そう言って先生は教室の外に声をかけた。

そして扉が開き、誰かが入ってくる。

一人め――セーラー服を着ていた。女子だろう。

黒い髪を肩まで伸ばしていた。

「綺麗な人だなあ……」無意識に優菜はそんなことを言っていた。

そして、二人目。

セーターを着て、学生服のズボン。男だった。

「……あれ？」

そこまで見て、優菜は気づいた。

……見覚えがある。

「どうしたの？」

鈴菜が不審に思って尋ねる。

「いや、なんでもないよ」

優菜は必死に冷静さをアピールする。

そして、彼女は思った。

――あの二人、夢の中で逢った、ような……。

7

「じゃあ、ひとりひとり自己紹介と行くか」

「じゃあ、まずは女子から」

先生の先導にしたがって、教壇の前に立つ。

そして、言う。

「私は、御行籌（ごぎょうかがり）」

それだけを言って。

なぜか、優菜の方を指差して。

「……」

教室が沈黙に包まれる。

「……えーと、じゃあ二人目だな」

先生の言葉に従い、教壇の前に。

そして彼は、“優菜が夢の中で聞いた声そのまんまで”言った。

「僕の名前は矢代健吾といいます。みなさんよろしく！」

――この二人は、一体何ものなんだろう？

――夢の中の人間とあったということは、

――あの瓦礫と化した街並みはほんとうに……。

彼女は、それしか考えられず、頭の中にそれ以外のことが、入ってこなかった。

1

「お、おはよう。御行さん。これから、よろしくね？」

まず、優菜は篝の席――といっても優菜の隣だが、の前にたって、話しかけていた。

「……よろしく」

篝は少し笑ったような顔をして、言った。

「じゃ、そろそろ次の授業始まるから」

優菜は笑って、元の席に戻ろうとした。

しかし、戻れなかった。

「待って」

「なに？」

篝が手を握ってきたからだ。

「……矢代健吾、には話しかけないで。ぜったいに関わろうとしないで」

「……矢代健吾？　もう一人の転校生のこと？」

優菜が不思議そうに返すと、篝は頷いた。

始業のチャイムが始まったのはそれと同時だった。

2

放課後。

「あ、御行さん」

優菜は靴入れから自分の靴を出しながら、小さく言った。

呼ばれた主は振り返ると少しおとなしい口調で言った。

「どうしたの？」

「いやー、一緒に帰ろう、かなぁって」

優菜は少し照れながら、笑って言う。

「……そうね。それもいいわね」

篝は長い髪を捲し上げ、言った。

「じゃあ、行こう」

優菜は篝の手を握って走った。

＊＊＊

矢代健吾は、街を歩いていた。

しかし、よく考えればここは町外れのとある商店街。
街の中心地より少し離れたところにある、彼のいる学校から考えると、今彼がそこにいるのは絶対にありえなかった。
「……このへんかな」
彼がたどりついたのは雑居ビルの裏側だった。
そして、そこには、謎の穴が空いていた。
どこに通じるかもわからない、穴が。
そして、彼はそこに入っていった。
誰にも気づかれることなく、誰にも言われることもなく。

3

ここは屈沢の中心街にある商店街。

たくさんのお店が犇めき、今は夕方であるためでもあるのだが、人がたくさんいる。

「屈沢名物、こごみコロッケ。いかがですかー！」

「あ、買わなきゃ。行こっ！」

「う、うん」

優菜に手を引っ張られ、籌は引きずられながら走っていく。

＊＊＊

「おいしいでしょ？」

「……おいしい。すこし苦いけど」

「そーだねー。はじめての人は苦味を感じるかも。でもそれがいいんだよ」

「ええ……」

籌は何か物思いにふけっているようにも感じられた。

しかし、それを優菜が気づくことはなかった。

4

「！！」

篝は咄嗟に何かに気づき、優菜を押し倒す。

「……ど、うした……の？」

優菜は低い呻き声をあげる。

しかし篝は篝でなくなっていた。

否、篝は優菜の優芽で見たままの姿になっていた。

「あなたは……夢で……！！」

「気を付けて……！！　吸い込まれるっ……！！」

刹那、ふたりは“消えた”。

何かに飲み込まれ、消えた。

＊＊＊

そのころ。服が沢山有る空間。服が多すぎて何が何やらわからなくなってしまってもいる。

「来たみたいだね」

そこには二人の男がいた。一人は矢代健吾。

そして緑色の服を着た男が、服で作られた山の上で寝転がっていた。

彼はハンマーを磨いて、鼻歌を歌っている。

「へえ……彼女が“あの”存在なのか。どのようにするのか楽しみだね」

「そうだろう。今回はどうやら彼女がそれにならないらしいけどね」

「へえ」ケタケタと壊れた人形のように嗤う。

「ま、その“ボディーガード”がどのくらいの強さか、見させてもらうこととするよ」

そう言って、矢代健吾は闇に消えた。

そして、それを見て後、男は携帯電話を開いて、どこかに電話をかけた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2851y/

黒板厨ゆうな☆マギカ　Rewrite

2011年11月9日02時00分発行